

兵士 アラン・フルニエ

鈴木正昭

- 〈目次〉
- § 1. 戦争まで
 - § 2. 動員
 - § 3. 出征
 - § 4. 戦闘突入
 - § 5. 運命の日
 - § 6. 埋葬地を求めて

1. 戦争まで

1914年7月、第一次世界大戦が始まった。そしてこの戦争が『グラン・モーヌ』で文壇に登場したばかりのアラン・フルニエという若い作家の生命を奪うことになった。作家は28歳の誕生日を目前にしていた。

大戦の直接の口火を切った事件は、あまりにも有名なサラエボにおけるオーストリア皇太子夫妻の殺害であったが、この事件がオーストリアとセルビアだけの問題に留まらず、人類始まって以来の世界大戦にまで発展してしまったのは、当時国々の間を網の目のように結んでいた、同盟や協商関係のためだった。

本稿は第一次世界大戦に至る国際関係についての考察をその主要目的とはしていないので、戦争までの概略だけを述べることにする。詳しくは専門書を参照していただきたいのであるが、筆者も『第一次世界大戦まで』、『最後の日々』⁽¹⁾においてこの時期を扱ったことがあるので、それも併せて参照していただければ幸甚である。

ビスマルク時代にはドイツが数々の国際関係における網の目の中心を占めていた。ところがその後フランスが中心になり1907年には日仏、日露、英露の協商関係が次々に締結された。これにより世界は英、仏、露、日という四大国と独、伊、オーストリアという対立の構図を持つに至った。

こうした中で1908年ボスニア・ヘルツェゴビナ問題が起こった。これはベルリン会議の結果、これら二州の管理を担当していたオーストリアがトルコ内乱を利用してこれらの地方を自国に編入してしまった事件である。ところがこれら二州の住民の大半はスラブ系であるので、セルビアも従来からこれらの併合に意欲を燃やしていた。しかしセルビア一国では大国オーストリアと張り合うことは不可能だった。そこで同じスラブ系の盟主であるロシアの支援を仰いだのであるが、日露戦争で大きな痛手を蒙った当時のロシアは当然ながらその力を持たなかった。そこで両国は涙をのんで、オーストリア

による併合を認めざるを得なかった。しかし、そのためにオーストリアとセルビア・ロシアの間には大きなしこりが残ることになった。

次いで1911年の第二次モロッコ事件が独仏関係を緊張させた。この時は英国がフランスを強く支援したため、ドイツは引き下がるを得なかった。さらに12年と13年の二度にわたるバルカン戦争がいっそうこの地域の政情を不安定なものにした。これはバルカンのセルビア、モンテネグロ、ブルガリア、ギリシャの四か国とトルコの争いである。トルコは結局敗北し、それぞれの国に対して領土の一部を割譲しなければならなかった。これが第一次バルカン戦争である。ロンドン条約でとり決められた領土の分配に関して、セルビアとブルガリアの間でマケドニアをめぐる争いが起こった。これが第二次バルカン戦争であるが、この紛争では当事者でないモンテネグロとギリシャもセルビア支援にまわったので、ブルガリアは降伏した。この結果に不満だったブルガリアはトルコとともにドイツ、オーストリアの陣営に接近することになった。こうして大戦勃発は刻一刻と用意されていった。セルビアの青年、ガブリエル＝プリンチプがオーストリア皇太子夫妻を襲撃したのはこのような背景下においてだったのである。

皇太子夫妻襲撃はオーストリアが軍事演習をこれ見よがしにサラエボで行い、自らの力を誇示したことに対するセルビア人の反感が原因であり、オーストリア側にもその責任の一端はあるのではないか、と思われる。事件が起こったのは6月28日のことである。この事件の結果を受け、オーストリア政府は7月23日にセルビア国内での反オーストリアの運動を取り締まり、団体を解散するようセルビア政府に迫り、さらには暗殺者の裁判におけるオーストリア政府代表の立会いを要求し、48時間以内の回答を求めた。しかし、これらの条項は、いずれをとっても主権国家としては到底受け入れることのできないものばかりだった。もちろん列強諸国は手をこまねいていたわけではなかった。とりわけ英国外相グレーは熱心に斡旋に勤めたけれども、彼の努力は不調に終わった。これを見てオーストリア政府は7月28日セルビアにたいして宣戦を布告した。サラエボの事件から僅かひと月後のことだった。

オーストリアの宣戦布告に対するロシアの反応はきわめて迅速だった。宣戦布告以前から戒厳令を一部に布告し、30日には密かに総動員令を発した。これを知ったドイツは8月1日ロシアに宣戦布告した。同日ドイツはフランスに対しても強硬な通牒を送り、総動員令を発した。同日フランスも総動員令を下し、3日には独仏両国は戦争状態に突入した。さらにドイツが中立国ベルギーに侵攻すると、英国はそれを口実に4日ドイツに宣戦布告した。こうして開戦から僅か1週間でドイツ、オーストリア、フランス、英国、ロシアという五大国が戦争状態に突入した。平和を守るためにも有効なはずの同盟関係というシステムはひとたび戦争がはじまると、その規模を限りなく大きなものにしてしまうものでもあることがこうして立証されてしまった。

フランスで総動員令が布告された8月1日、アラン・フルニエは愛人のシモーヌとともにカンボに滞在中だった。カンボはスペイン国境にほど近い小さな町である。シモーヌは当時有名な女優で、高名な評論家ジュリアン・パンダとはいとこ関係にあった。彼女は前大統領の息子クロード・カジミール＝ペリエの妻だった。したがってフルニエと彼女とはいわゆる不倫関係にあった。この間の事情については拙稿『最後の日々』を参照していただきたい。2人は7月の中旬にパリを出立してこの地に赴いた。途中17日にはボルドーに立ち寄ってオテル・ド・フランスでリヴィエール夫妻と会食した。そしてこれが仲の良かった兄と妹の、そして10年来の無二の親友との最後の会見になることを、この時点では彼はもちろん妹夫妻も知らなかった。

前日の31日には社会主義者の大立者ジャン・ジョレスが暗殺された。彼の死によってドイツとフランスの労働者が連帯して戦争に反対しようとする運動は挫折した。労働者の共通の利害に基づいて行動し、それにより政府の動きを制約するにはまだ労働者の力は不十分だったのである。同日フルニエは前年『グラン・モーヌ』を出版したエミール・ポール社の当主にカンボから書簡を送り、原稿料の送付に関する事務的な手続きについて述べた後、次の作品である『コロンブ・ブランシェ』の執筆に励んでいること、しかしいつ動員されるかわからない状態ではフィクションの世界にのめりこむ事は困

難であることを訴えている。⁽³⁾

2. 動員

そして8月1日にはアラン・フルニエにもジャック・リヴィエールにも動員が下った。前者はミランドへ、後者はマルマンドに赴くことになった。ミランドは20歳になったフルニエが兵士としての訓練を2年間にわたって受けた土地であり、その後も訓練を受けるために出かけたことのある馴染みの土地だった。この日ドイツ軍はルクセンブルクに侵攻、3日にはベルギーにも侵攻した。

この日付の兄宛の手紙で、イザベルは夜に総動員令が出されること、既に夫の兄弟が独仏国境に配置されており、戦争になれば真っ先に危険にさらされること、戦地に赴いたら家族に頻繁に消息を知らせてほしいことなどを伝えた。⁽⁴⁾フルニエはこの日、シモーヌとともにバイヨヌヌに買い物に出かけた。戦地での必需品を整えるためである。そしてグラン・カフェからイザベル宛の手紙を書いている。短い書簡で、その内容は2日にミランドに出頭すること、リヴィエールと同じ軍団でよかったと思っていること、きっと戦争になると思っていたこと、自分は満足して戦地に赴くこと、じきに妹に再会できるだろうと考えていることなどである。彼が戦争を必ずしも忌避していなかったこと、また戦争がそれほど長引かないだろうと予測していたことがこの文面から伺える。⁽⁵⁾

戦争が短期的なものであろうという予測は彼だけのものではなかった。それどころか当時の人々にとっては共通の予測だったように思われる。つまり、それまでも戦争は数々あったけれども、これほどまでに大規模な戦争が長期間に渡り、世界中の人々を巻き込んで行われることなど、その経験のなかった人々の予測能力を超えていた。この戦争を経過することによってはじめて、人々は世の中が変わり、したがってその戦争もまた性格を一変させてしまったことを認識することになった。専門家ですらいまだこうした変化に

気づいていなかったのであるから、いかに明敏であったとはいえフルニエ1人がそれを洞察できる筈がなかったのである。

2日にはドイツ軍は早くも国境を超えてフランスに侵攻した。ただし、正式の宣戦布告は翌日(3日)の午後6時のことだった。同日深夜になりフルニエとシモーヌはカンボに帰宅。この日、フルニエは中尉に昇進した。3日にはいよいよドイツとフランスは戦闘に突入した。フルニエは別れたばかりのシモーヌに早速手紙を書いた。この手紙は現在失われているため、1964年の9月24日から30日まで『フィガロ・リテレル』紙に掲載されたテキストに基づいている。その中には「今や君は僕の妻だ」という言葉が見られる。事実2人の間では無事戦争から帰ったら結婚しようという約束ができていたのだ。この婚約は買い物に赴いたバイヨヌのカテドラルで2人だけで約束された。さらにシモーヌがカンボに戻る途中ポーから豪雨について引き返し、買い忘れていた買い物を手渡してくれたことに対する感激が表明されている。シモーヌ自身の記憶では彼女はタルブでスカーフ、チョッキ、セーターを購入したのである。またクロード・シカール氏によるこの書簡への注によれば、フルニエは英語の通訳として後方勤務の可能性もあったのであるが、彼自身の拒絶によって実現しなかった。彼はこの提案に対しては「もし戦争になったら、仲間とともに戦いたい」と語ったそうである。この日はまた英国政府がドイツに対し、最後通牒を送り、ベルギーからの撤退を要求した。

翌日(4日)にフルニエはイザベルに手紙を書き、シモーヌの勇敢な行為について述べた後、戦争が終了次第彼女と結婚する予定であることを打ち明けた。月曜まではミランドが、それ以後は自らの所属部隊がその宛名となり、所在地の表示はなくなることに注意を促した。その宛名は以下の通りである。フルニエ中尉、17軍団、288歩兵連隊、23中隊⁽⁶⁾。

この書簡には「美しく、偉大な正義の戦争」といった表現も見受けられる。戦争それ自体に対する懐疑の調子がまったく見受けられないのは、平和を至上の価値と考えている今日の我々から見れば不思議である。日ごろは斜

に構えた態度を取りがちな文学者の多くがフルニエ同様愛国的とっていい態度を取ったところからも、今日的な視点で当時の人々を判断することの空しさが理解されよう。戦争は今日の常識とは異なり、当時は必ずしも悪ではなかった。カントの『永久平和論』を引き合いに出すまでもなく、それ以前にも平和の尊さを説く議論がなかったわけではない。さらに1899年にはハーグで国際平和会議が開催された。しかし帝国主義時代まではこうした議論は必ずしも支配的ではなかったこともまた事実だった。この時代には平和はあくまでも建前であり、必ずしも痛切に希求されるものではなかった。大戦があまりにも多くの犠牲を伴ったため、平和の追求が国際社会の大きな目的になったのである。短期間で挫折を見たけれども国際連盟をはじめとする組織が戦争の防止のために設立されたのも、二度とあのような大きな損害を出さないようにという願いが多くの子の共通認識になったからである。

戦争が必ずしも悪ではないという認識は当時我が国でも共有されていた。強国から我が国を守るため、また植民地を得るためと目的はそれぞれであっても戦争それ自体は必ずしも悪ではなかった。そして勇敢に戦った兵士は英雄、軍神として崇拜された。そして英雄、軍神の出身家庭はそれを誇りとした筈である。したがって戦争に負けたからといって急に戦争が、また戦争による死者に敬意を表すことが悪と見なされるようになったことに、割り切れない思いを抱く人々が多数存在することは容易に理解できる。今年の夏も年中行事のように繰り返され、多くの国民を暗い気持ちにさせた靖国神社の参拝問題の根は深いのである。

当時はフルニエのみが特に好戦的、軍国主義的な若者ではなかったことに注意する必要がある。従軍した文学者はおびただしい数に上り、当然の結果として多くの文学者が戦死した。この中には年齢的には兵役の義務からは解放された中年の文学者も多数含まれていた。志願して祖国のために戦うことは当時冷笑の対象とされる行為ではなかった。フルニエの死は痛ましいが、ほかにも多くのフルニエ青年がいたことを忘れてはならない。だからその戦争は戦後深刻な反省を多くの人々に強いることになったのである。

先に見たように国際連盟の創設ももちろんこの戦争の反省から生まれたものだった。もっとも、それにもかかわらず、次の大戦を阻止できなかったところに人間の営みの無力さを痛感させられることもまた事実である。さらには第二次大戦後も冷戦の時代が長く続き、平和の訪れを期待した人々の期待はまたしても裏切られることになった。さらにはこの冷戦構造がソ連の崩壊によって終結したときにも、今度こそは平和な時代が到来すると喜んだ人は多かった。しかし、それも数多くの地域紛争の勃発により、短期間で裏切られることになった。さらには本年9月11日のニューヨークの世界貿易センターやワシントンの国防総省への同時多発テロを引き合いに出すまでもなく、テロ自体が単なるテロと言える規模をはるかに超えた、宣戦布告のなされない新たな戦争として登場してきている。どうやら戦争は地域紛争、大規模テロなどに形を変えて21世紀にも生き続けそうな模様である。人間がこの世にある限り戦争もなくなるのではないのか、という暗い気持ちから逃れることはよほど楽天的な人でない限り不可能かもしれない。

8月4日の夜半には英国とドイツが戦争状態に突入した。5日の日付をもつシモーヌ宛の手紙では、英国の参戦に対する煮え切らない態度への不満が表明された。¹⁹⁾フルニエから家族やシモーヌ宛の手紙は書かれた日付ではなく、着信日が記載されているケースが多いのでこのような日時のずれが散見されることになる。当初英国はアルヘシラス会議ではフランスに対して何も約束していないから、という理由でフランス側にたって参戦することには否定的だった。しかし結局4日の夜になって英国はドイツに宣戦を布告した。この手紙ではまた両親の所在についての懸念も表明された。急な動員令だったため彼は出発前に両親に別れを告げることができなかったのである。

5日から6日にかけてフランス軍は侵入したドイツ軍に対してよく戦い、戦況は一進一退を繰り返した。こうしてドイツ軍の西部戦線での計画は出鼻をくじかれることになった。6日にはその両親がボルドーに到着した。夕方重い荷物を持ち、疲労困憊し、垢にまみれ、しわだらけの服を着て自分の前に現われた2人の旅人が自分の両親であることがイザベルにもすぐにはわか

らないほど2人の様子は変わり果てていた。⁽¹⁰⁾開戦と同時に交通事情が非常に悪化していたことがわかる。両親はイザベルのもとで一晩を過ごしただけで、リヴィエールに別れを告げるため、マルマンドに向かった。2人はそこで義理の息子に会うことができた。リヴィエールにとっては義理の両親がわざわざ自分を追いかけてマルマンドまで来てくれることは予想外のことだった。リヴィエールはこのときの様子を8日付けの書簡でイザベルに報告した。⁽¹¹⁾

7日には英国は同盟国だった日本にドイツの武装巡洋艦の発見と撃破を要請した。その要請を受けた日本は千載一遇の好機到来とばかり積極的な参戦を決定したため、英国の不信を招くことになった。そこで英国は日本に対し、英国商船の保護のみを依頼する旨申し入れたが、日本政府はそれには耳を貸さず、15日にはドイツに対し最後通牒を突きつけた。こうした戦争への協力要請に対し、昔はやりすぎて不信を買い、湾岸戦争の際は何もしないと言って不信を買うのであるから外交は難しい。湾岸戦争の際に我が国は多額の戦費を供出したにもかかわらず血を流さず、汗もかかないといって批判されたことは記憶に新しい。この度の米国中枢部に対するテロへの対応ではどのような評価を受けることになるのであろうか。

3. 出征

8日には両親がミランドを訪れた。2人が到着したのは正午過ぎのことだった。2人はそこでシモーヌが息子とともにいることに非常な驚きを示した。フルニエはそれまで両親にはシモーヌとの関係を何も話してはいなかったからである。9日にはフルニエの所属する連隊は早朝4時にミランドを出発しオッシュを目指した。そして3日間そこに滞在しただけで、12日の夜9時オッシュを出立し次の目的地を目指した。両親はシモーヌの車でミランドからオッシュまで後を追ひ、フルニエを見送った後、シモーヌとともにカンボに向かった。フルニエがいなくなると、シモーヌは母親を呼び、自分たち

の関係を話した。両親は息子とシモーヌの結婚の話をすんなり認めたようである。イザベルはこのような不倫の関係を認めることは両親の日ごろの思想信条からするなら想像を絶する事実であると述べ、それを戦争による価値観の混乱のためである、としている。また疲れ果て、茫然自失の状態にあった母親はシモーヌが息子を守ってくれる御伽噺の守護神のような存在であると考えたのではないかと述べている⁽¹²⁾。全体的にイザベルの著作はシモーヌに対しては手厳しいけれども、こうした微妙な問題は第三者が介入しにくい問題である。イザベルとシモーヌの間ではフルニエの遺品をめぐるでも争いが起こった。シモーヌと仲良くして欲しい、というフルニエの願いも空しく、二人の間の溝は徐々に深まっていった。2人の確執は1910年代から60年代にまで実に半世紀にも及んだ。12日付けのイザベルへのはがきには両親やシモーヌとの別れの模様が簡単に述べられている⁽¹³⁾。さらに自分たちはトロワを目指しているらしいことも述べられている。

14日の日付をもつイザベル宛のはがきでは48時間前から北東に進んでいること、現在地はブルジュの近らしいこと、美しいフランス語を話す子供たちの声が聞こえたことなどが報告された⁽¹⁴⁾。ここでもブルジュという具体的な地名がはがきという媒体に記載されている。我が国では兵士から家族に宛てた手紙に所在地を記入することは難しかった。機密漏洩を防ぐため、兵士から銃後への手紙は様々な制約を受けるのが普通であるが、そうした制限にも国により多少の相違が存在したのである。

しかし、そのことはフルニエやその家族たちが郵便物の往来に関して満足していたということを必ずしも意味していたわけではない。それどころか、なかなか届かない郵便物にいらだつ様子が随所に見受けられる。郵便物から敵に軍の所在が明らかになるのを恐れて、時期を遅らせているのではないと思われるけれども、それは無用の心配である。なぜなら、我々末端の兵士はもともと敵に知られて困るほどの秘密など知らされていない。それよりも家族からの手紙が頻繁に届くことこそ、味方の士気を高める有効な手立てなのに、という記述が見出される⁽¹⁵⁾。もちろん、郵便の遅配が、敵に対する防

衛的な目的のためであったのか、それとも本当に交通の手段や、配達の人員が確保できなかったからなのかは確認できない。恐らくはそのいずれでもあったのであろう。

8月16日の日付をもつイザベルからフルニエ宛の書簡はスノンから投函された。オッシュュからはがき以来便りのないことが心配であること、ジャック・リヴィエールからもこの4日間便りのないこと、残された家族は『元気です。あなたのことを思っています。あなたのために祈っています』と伝えることしかできないこと、そのため自らの力を戦地の愛する人とともに戦うのではなく、苦しみや不安や疑いと戦うためにだけ使わざるを得ないこと、などが切々と述べられている。⁽¹⁶⁾ もちろんこれは家族を戦場に送ったすべての人々の抱く普遍的な感情であるが、読むものを肅然とさせる力を持っている。

20日の日付をもつシモーヌ宛の長文の手紙はフルニエが従軍以来書いた最も長い手紙で、書簡集でおおよそ9ページある。いよいよ国境近くに来たことが報告されているが、故意か偶然かは不明であるが、具体的な地名に関する記述はない。19日にこの地に到着した。昨日も今日もシモーヌのことがばかり考えていたこと、シモーヌと自分の両親の仲が必ずしもしっくりしていないことに対する心配、両親の欠点に寛容であってほしいこと、などが事細かに述べられている。また宛名がきちんとしていないと手紙が届かないことを伝え、288連隊、23中隊という宛名をきちんと書くよう指示した。⁽¹⁷⁾ ついでながら陸軍の編成は大きいほうから師団、旅団、連隊、大隊、中隊、小隊である。

シモーヌ宛の長文の手紙以降1週間以上にわたって消息は途絶える。その間24日にはリヴィエールが捕虜になり、ケーニヒスブリュックに抑留された。この抑留生活は3年以上にわたった。リヴィエールの消息はそれから不明の状態が長く続いた。イザベルが夫の無事を確認するのは、およそ2カ月後のことだった。彼はドイツ国内で捕虜生活を送っている間に逃亡を試みて失敗し、独房に収容されたこともあった。その後、衰弱を理由にしてスイ

スに移された。ドイツ国内の収容所との文通は自由だったし、スイスに移動後は面会が可能になったので、イザベルたちはスイスまで面会に出かけている。イザベルの苦悩は夫に関する限りは軽減されることになった。

28日にはフルニエからイザベルにはがきが届いた。当時戦場から銃後の家族宛の手紙は2週間を要した。もちろん例外はあり、もっと早く、たとえば1週間くらいで届いたものもある。このはがきはしたがって8月14日から20日くらいの間にかかれたものと思われる。遠方に銃声が聞こえること、はがき以外の手紙の受け取りは今後は不可能であること、自分に万一のことがあった場合にはパリのカッシーニ街の家に行き、トランクおよび書棚を調べて、シモーヌに関係のないものはすべて捨て、シモーヌに関するものはすべて彼女に渡すよう依頼した。⁽¹⁸⁾

ところでその間シモーヌはパリに残した貴重品を取りに、フルニエの父をパリに使いに出している。さらには8月30日には機密を要する書類を疎開先に移すため、自らパリに赴いた。9月はじめにシモーヌがタクシーでスノンのイザベルの滞在先を訪れた。そしてフルニエの消息を尋ねた。イザベルは28日に届いた、日付と投函された地名のない上記のはがきを示した。それを読みシモーヌは当惑した表情を浮かべ、フルニエの父とともにパリのフルニエの住まいに行き、その書類の入ったかばんを持ってきたことを打ち明けた。そしてシモーヌを怒らせないように抗議しようと考えていたイザベルをその場に⁽¹⁹⁾残してそそくさと立ち去っていった。

それから何日か後、夜になってシモーヌが再びイザベルのもとを訪れた。時ならぬ彼女の出現にイザベルは最悪の事態を覚悟した。しかしシモーヌの出現の理由は他にあった。ドイツ軍のすばやい侵攻に危機感を覚えたフランス政府はその所在地を一時的にボルドーに避難させた。そこでシモーヌは旧知の首相ブリアンに依頼してフルニエを前線から安全な後方勤務に変えてもらおうと考えたのだった。そして予告なしにイザベルのもとに宿を求めてきたのだった。イザベル自身、夫の実家に居候の身ではあり、夫の親族に気を遣ったが、その場は事なきを得た。しかし、フルニエを後方勤務にしてもら

う、という点に関してはシモーヌとイザベルの見解は大いに異なっていた。自分にとって今は唯一大切な人になったフルニエをどうしても無事生還させたい、と主張するシモーヌに対し、大体そんなことを首相が聞き入れるはずはないし、もし聞き入れたとしてもフルニエ自身が後方への移動を拒絶するであろう、というのがイザベルの主張⁽²⁰⁾だった。しかも、大切な人に無事帰ってもらいたいというのは、兵士を出した家庭、家族すべての願いでもある。さらにイザベルは自分の父親や母親を召使のように扱うシモーヌの態度や、シモーヌの考え方をそのまま復唱しているような両親の変貌振りにも不快感を禁じえなかった。シモーヌと仲良くやって欲しいというフルニエの願いも空しく、2人の女性の仲もなかなか平和を維持することは困難だった。その場は何とか取り繕ったけれども、シモーヌが離婚した女優であることを快く思わない夫の親戚の意向もあり、シモーヌはやがてボルドーに部屋を見つけて移動していった。命の危険こそないけれど、銃後も決して平和ではなかったのである。互いに長寿だった2人の女性の確執は先に見た如く半世紀後もそれぞれの著作により継続されたほど根深いものだった。

いよいよ戦場が近づいてきた。開戦以来およそ25日、それまでの戦況を概観してみよう。西部戦線ではドイツ軍はベルギー軍の予想外の強さにてこずっていた。そのためフランス軍や英国軍に準備を整える時間的余裕を与える結果になった。また東部戦線でもロシア軍の迅速な展開にドイツ軍はむしろ押され気味だった。皇帝はそこでヒンデンプルクを東部戦線司令官に任命し、ルーデンドルフを参謀長にしてこれを補佐させ、2人を中心に東部戦線の立て直しを図った。さらに西部戦線の戦力の一部を割いて東部に回した。そして8月23日から31日にかけてワルシャワ西北地帯でドイツ・ロシアの激しい戦いが繰り広げられた。後に「タンネンベルクの会戦」と呼ばれる死闘の結果はドイツ軍の圧勝に終わった。ロシア軍は死傷者10万人、捕虜10万人という大きな犠牲を払わなければならなかった。フルニエがシモーヌに銃声が聞こえてきた、というはがきを書いたころ東部戦線では独露両軍の死闘が繰り広げられていたわけである。この戦闘でのドイツ軍の死傷者はロシ

アのそれよりもはるかに少ない1万2千人だった。

東部戦線ではロシア軍に圧勝したドイツ軍ではあったが、西部戦線では戦力の一部を東部戦線に割いたためもあり、ドイツ軍の目論見どおりの展開にはならなかった。十分な戦力を確保できなくなったため、開戦前に参謀本部が立てていたシュリーフェン計画の実施は困難になった。これはドイツ軍の右翼に強大な兵力を確保してフランス軍の左翼を包囲しながら回転して、フランス軍を一挙に殲滅しようとする雄大な計画だった。このような計画を机上の目論見どおりに遂行することは不可能ではないかという気が素人である筆者にはするのであるが、いずれにしてもドイツ軍は部分的に縮小されたシュリーフェン計画を実行に移さざるを得なくなった。フルニエが戦線に近づきつつあったところの戦況はおおよそこのようなものだった。

30日の日付をもつシモーヌ宛のはがきでは非常に元気であること、間もなく当地を立出する予定であること、戦況は味方に有利であるらしいこと、家族からの便りが一番の元気の元であること、そこから先に見たような郵便物の遅配に対する批判的な言葉が出てきたわけである。戦地から家族宛の手紙が遅れるのは情報漏洩防止の意味から理解できないことはないけれども、家族から兵士宛の手紙が届かなければ兵士の戦闘意欲は低下してしまい、結局味方のためにもならないではないか、というのが彼の主張だった。

4. 戦闘突入

9月になった。288連隊はこの日から戦闘に突入した。3日にはシモーヌからフルニエに手紙が書かれた。8月末にパリに旅行したこと、ところが車の確保に苦勞したこと、さらには通行許可証の交付がない限り自由な通行が不可能なこと、カンボに戻った翌日からは車でパリを出ること自体が禁止されたことなど市民生活も様々な制限を蒙るようになったことが縷々述べられている。この旅行こそ、シモーヌが自分の一存でフルニエのアパートにあった書類や原稿を持ち出し、イザベルを当惑させた旅行であることは言うまでも

ない。

カンボに戻ってみると前線から負傷兵が到着した。開戦以来1ヵ月、いよいよ事態は深刻さを増していった。彼ら負傷兵のために働きたいからそれを承認して欲しいと言う彼女の依頼も同時に述べられている⁽²²⁾。これはフルニエの医師に対する不信の念を彼女がよく知っていたからである。

3日の日付をもつフルニエからシモーヌ宛の手紙にはリヴィエールの消息について述べられている。8月24日の戦闘で負傷したかもしれないこと、どこかの野戦病院に収容されたか、それともドイツ軍の捕虜になったかのいずれかではないかと思われること、リヴィエールは死んではいないと願っているし、また死んではいないと確信していることなどがその内容である⁽²³⁾。

4日の日付をもつスノンのイザベルからフルニエ宛に書かれた手紙にはリヴィエールからも、マルクからも便りがなく、フルニエ、リヴィエール共通の友人であるロートが出征直前に大病にかかったこと、娘のジャクリヌが花を摘んで、フルニエの写真に供えていることなどが報告されている⁽²⁴⁾。

6日の日付をもつシモーヌからフルニエ宛の手紙が2通書かれた。1通ははがきで、もう1通はやや長文の手紙である。はがきにはもう1週間も消息がないこと、負傷兵たちは快方に向かっていることなどを伝え、同時にもう1通の手紙を書いたことが伝えられている⁽²⁵⁾。その2通目の手紙にはピアリッツに288連隊の負傷兵が何人かいるらしい、という噂を聞き当地に滞在していた劇作家のエドモン・ロスタンに車を手配してもらいピアリッツまで駆けつけたこと、しかし8月31日に当地の病院に収容された2名の負傷者は既に退院してミランドやオッシュの原隊に復帰したことを伝えられて一安心したこと、こうした負傷兵の噂を聞くと、いてもたってもいられないこと、などが切々と訴えられた⁽²⁶⁾。

こうした手紙をイザベルやシモーヌが書いている間にも、西部戦線では9月5日からおよそ1週間にわたって有名な「マルヌの会戦が」戦われていた。ジョッフル將軍率いるフランス軍は勇敢に戦い、ドイツ軍の中央を突破した。これによりシュリーフェン計画は挫折を余儀なくされた。すなわちフラ

ンス軍を包囲して一挙に勝敗を決するというドイツ軍のもくろみは破綻したのである。この会戦以降戦線は膠着化し、戦争の長期化が不可避になった。このマルヌの会戦時におけるフルニエの消息を伝える証言がある。従軍司祭のピエール・モリーの証言である。激しい戦闘による死傷者の続出にある兵士が司祭に『お前さんの神様はどこにいるのかね』という皮肉な言葉を投げかけたとき、たまたま通りかかったフルニエが次のように言ったのだった。『僕はこの戦争のどこに神がいるのか知らない。人間にはこの世界の謎を説明することはできないからだ。しかし、神が望んだときに、神の望まれたように、神の望みの場所で銃弾に倒れるであろう、ということを僕は知っている。』

シャルル・ペギーがヴィルロワで戦死したのは9月7日のことだった。フルニエがある意味では悟りきったような、既に自らの死を覚悟したような言葉を口にした翌日の死である。およそ2週間後にはフルニエ自身に死が訪れるのであるが、彼はそのあまりにも早かった晩年に傾倒した先輩作家の死を知らずに終わったものと思われる。いずれにしてもマルヌの会戦はこの熱烈なカトリック詩人の生命を41歳と言う若さで摘み取ってしまったのである。

ペギーのように兵役年齢を過ぎていたにもかかわらず志願して戦線に向かったのは文学者だけではなくた。高名な作曲家のモーリス・ラヴェルも同様だった。彼は大戰勃発時には既に39歳だった。もっとも彼の場合は兵士としての資質に欠けているという理由で兵士になることは許されずトラックの運転手として参戦することになった。また4つの交響曲をはじめとする作品を残した作曲家アルベリック・マニャールの場合には50歳近い高齢にもかかわらず、こちらは兵士として参戦し、1914年に名誉の戦死を遂げた。

9月7日の日付をもつ2通の手紙がシモーヌからフルニエ宛に書かれた。2通目は夜10時という記述がある。ここでも消息が知れないことへの不安が語られているほか、フルニエの父がピアリッツの海岸でスカプラリオ（修道服の一部分、肩から前後に垂れる幅広の布）と聖クリストフのお守りを拾って喜んでいたこと、母親は白い服の夢を見たけれど、これは彼女にとっては幸福

を約束する夢であること、などが報告された。そして70年の戦争（普仏戦争）についての本を読もうとしているけれど、なかなか読めないでいることも併せて述べられた。²⁸銃後の家庭の様子は今次大戦の際の我が国でも恐らく同様であったものと思われる。息子や夫の無事を願い、普段はご無沙汰している教会や神社に足を運んだり縁起をかついだりすることが平和な時代よりも多くなったのではないだろうか。

2通目の手紙にもこれとって特別なことは語られていない。昨夜は寝られなかったので、それを取り戻そうとしたけれど、昼寝もできなかったことが語られた後、相手を気遣う言葉が書き連ねられた。こうした部分に見受けられる彼我の相違も興味深いものであるが、日本人の書簡に比して非常にストレートな表現も散見され、戸惑いを覚えさせられることがしばしばである。

9日にはフルニエからシモーヌ宛のはがきが届いた。日夜厳しい状態に置かれていて出征前に用意した品々が大活躍している、という記述が見受けられるので、マルヌの会戦開始以降に書かれたものであろう。またほとんど同じ場所にいる、とも書かれているので、戦局は既に膠着状態になっていたのではないと思われる。しかしそれでもなお彼は11月にならないうちにシモーヌに再会できるであろう、という希望を語って²⁹もいる。実際それまでの常識で判断する限り、何年も続く戦さというものは想像できなかったであろう。もちろん過去においても、たとえば30年戦争などというものがあつたし、それどころか100年戦争などという戦争も存在した。ただし、これらの戦争は国民国家成立以前のもので、一般の民衆も畑を荒らされるなど被害を蒙ることはあつたけれども、基本的には限られた身分のもの同士の間での戦争であつた、という点でフランス革命以降の戦争とは根本的に性質を異にしていた。開戦当時誰もが戦争は年内に終結するであろうと思つていたことを考えるなら、やはり第一次世界大戦は異例づくめの戦争だつた、と言わなければならない。しかし、先にも見たように当時は軍事専門家にもそれが理解されていなかったのであり、フルニエだけが例外ということはある得なか

ったのである。

10日の日付をもつシモーヌからフルニエへの手紙は、ボルドー近郊スノンのイザベルのもとに滞在中に書かれた⁽⁹⁰⁾。彼女は8日にフルニエの母と一緒に当地を訪れたのだった。言うまでもなく、ボルドーにいる首相のブリアンにフルニエを危険な前線から安全な後方勤務にまわしてもらうよう依頼する目的だった。しかし、スノン滞在はシモーヌにとって快適なものではなかった。リヴィエールの叔父のなかに離婚歴のある役者に対する反感を持つ人物がいたからである。そのためボルドーで部屋を探すことになった事情は先に見た通りである。

同じ10日の日付のあるイザベルから兄への手紙には父親からフルニエが戦闘を経験した事実を知らされたこと、リヴィエールの消息が依然として不明であること、マルクの1日付けの手紙が届き、無事であること、シモーヌや母親と会えて幸せなこと、ジャクリヌは元気なことなどが報告された⁽⁹¹⁾。

11日の日付のある手紙はフルニエからイザベルへの最後の書簡である。彼女からの何通もの手紙を一度に受け取ったこと、リヴィエールの近くに行きたいと思っていること、現在の任務は騎馬による参謀付き武官であること、戦争の結果には確信を持っていること、自分たちのために祈って欲しいこと、などが述べられた⁽⁹²⁾。

12日から15日までの4日間の日付のある手紙は皆無である。イザベルからも、また両親からも1通も手紙が書かれなかったし、フルニエからもいづれに対しても手紙が出されていない。やっと16日の日付のあるフルニエからシモーヌに宛てたはがきが出された。ここでも手紙がなかなか届かないことへの不満が述べられている。14日からは休息中であること、雨が降って寒いこと、しかし、そのために戦況が味方にとって有利に展開したこと、そのため勝利を手中に収めたこと、などである⁽⁹³⁾。この最後の判断が誤りであることは何度も述べた通りである。実際には戦争はまだ始まったばかりで、これから先3年以上も続くのである。

17日の日付のあるシモーヌおよび両親宛の手紙には休日が増えたこ

と、暇なときには眠るか、手紙を書くか、なかなか届かない手紙の届くのを待つかのいずれかしかしないこと、ミランドやオッシュでは様々な風説が乱れ飛んでいるので、家族のものがそこに滞在していないのは幸いであること、いずれにしても戦争についてあれこれ雄弁に語る人の言葉を軽々に信じてはいけないこと、戦闘での深刻な経験をしたものは戦闘について語りたがらぬものであることなどが述べられている。⁽³⁴⁾これは私たちの周囲の戦争経験者についても同じことが言えるようである。人は己の経験を人に語りた生き物であるが、それと同時にあまりにも深刻なそれはむしろ語りたがらないものでもある。戦闘で敵国の兵士を殺害した兵士は生還後、自らの武勲についてあまりとくとくととは語らないものである。もしそのような人物がいたら、人間的な感情に欠けているか、法螺を吹いているかのいずれかであろう。

19日の日付のあるシモーヌおよび両親宛てに書かれた手紙が現存するフルニエの最後の書簡になった。暇があれば電報、はがきを、さらに余裕があれば長文の書簡を直接、あるいはショカルヌという人物に託して出している、と述べられている。このショカルヌという人物については研究者たちの努力にもかかわらず、今日までのところ何もわかってはいない。自分宛ての郵便物はミランドの本隊から前線に行く部隊に託せば早く届くことを告げ、もう長いこと郵便物を受け取っていない、と寂しさを訴えている。戦況が味方に有利であることを述べ、銃後の人々もその喜びを共有してくれているであろうと述べた後、味方の決定的な勝利と平和を祈るよう依頼した。戦闘から離れ、人間に戻ると兵営にいた頃のように、また演習のときのように退屈を覚える、しかもそれよりはるかに退屈であると訴えた後、この手紙を締めくくった。⁽³⁵⁾

5. 運命の日

そして運命の22日がやってきた。彼は21名の仲間とともに偵察を命ぜられ、そのまま行方不明になった。その後もシモーヌや家族からは何通もの書簡が空しく送られ続けた。26日と27日にまたがって書かれたかなり長文の手紙では、これまでに電報やはがきは別にして少なくとも38通の手紙をフルニエに出した、と述べている⁽⁵⁶⁾。しかしながら、2人の往復書簡集には僅か5通しか収録されていない（その後10月9日までにさらに8通の手紙が書かれている）。シモーヌの言っていることが正しいとすると、いかに未曾有の大戦の最中とはいえ行方不明になったものが多すぎるように思える。フルニエの死後母からもさらに2通の手紙が、イザベルからは1通の手紙が収録されている。フルニエの行方不明をイザベルやシモーヌが知ったのは10月14日のことだった。ジュリアン・バンダ宛てに288連隊の大佐から届いた電報により彼女たちはその事実を知ったのだった⁽⁵⁷⁾。

その後も家族の必死の探索にもかかわらず、フルニエ中尉の消息は杳として知れなかった。イザベルをはじめフランスに戻ったりヴィエールらの探索の結果はイザベルの著作に詳しい。また1960年代までの成果に関してはジャン・ロワーズの浩瀚な研究書に詳しいのであるが、遺骸のありかなどは依然として不明のまま残されていた。しかし、この曖昧な状態に終止符を打ったのはミシェル・アルグランらの研究の結果である。ここではモーリス・エルンストの報告に基づいてそこに至る経過をたどって見よう。アルグランはこの研究に着手した当時パリのモリエール中学校長の職にあった。彼は以前からアラン・フルニエの死に伴う曖昧さが気になっていた。彼はジャン・ロワーズの著作にも飽きたらぬものを覚えていた。

1914年9月21日、フルニエは288歩兵連隊、6大隊、23中隊に所属していた。彼はマルヌの会戦では連隊とともにスイイ・イペクルの防衛区域で戦った。その後しばらくロズリエの砦に置かれた旅団本部に配属された。この

配置換えの事実についてシモーヌは9月半ばのフルニエ本人からの電報で承知していた。9月19日にはシモーヌ、イザベルたちはペギーの戦死を知った。フルニエたちの母親を含めた3名はブリアンに会いに行き、そこでペギーの死を知らされたようだ。³⁸⁹戦死した日から既に2週間近くが経過していた。3人は帰りのタクシーの中で泣いた。激しい戦闘で多くの死傷者が出たため、フルニエは20日に旅団本部から再度23中隊に戻り、その指揮をとることになったのだ。それまで指揮をとっていたグラモン大尉は大隊の指揮をとることになった。その間、彼らはヴェルダン北方での敵の追跡にあたり、その後オー・ド・ムーズの防御戦のため南方に配属された。

22日にはヴォ・レ・パラメに駐屯していた23中隊はマリアン中尉に指揮される22中隊とともに当時所属が明確でなかったカロンヌの塹壕方面の偵察を命令された。フルニエは前日のシモーヌ宛の至急便で自分が原隊に復帰する旨を伝えた。それは22日にはシモーヌに既に届いていた。その事実を知ったシモーヌはイザベルや母親が安全な後方勤務に反対したからまた危険な前線に戻るようになったのだと2人をなじった。³⁹⁰

ところがフルニエたちが偵察を命じられた地点には敵の姿は見られなかった。しかし二つの中隊の指揮をとるグラモン大尉はさらに東まで偵察を続けるよう指示した。森を出てしまうとその高みから、あたりの様子を概観することができた。

二つの中隊は4列縦隊で進軍した。そして森の出口に近い地点で22中隊は左に、23中隊は右に道を取った。間もなくドイツ軍兵士と、1台の車が出現した。後に判明したところでは、これは移動衛生部隊とその看護兵だった。銃撃戦が始まった。ところがその最中にフランス兵たちは新たに背後からの攻撃を受けた。彼らを攻撃したのは近くの塹壕に潜んでいたドイツ軍の小隊だった。フランス兵たちは塹壕を迂回してしまったために、ドイツ兵の存在に気がつかなかったのだ。不意を突かれたフランス軍はたちまちのうちに大きな被害を蒙った。その中にグラモン大尉、フルニエ中尉、アンバール少尉の3名の士官が含まれていた。他の兵士たちは懸命にカロンヌの塹壕地

点まで退却した。夕方になり、3名の士官と、1名の下士官を含む21名の兵士の行方不明が確認された。ここまでが1977年までに判明した事実だった。サン・レミ街道とヴォ・レ・パラメ街道の交差する場所には1964年にこれらの兵士たちの戦死したのはこの近辺であると思われる旨を記した大きな十字架が立てられた。

6. 埋葬地を求めて

それまでの研究結果に飽き足りなかったミシェル・アルグランは二つの中隊がカロヌの塹壕から後たどった道程を確定することから着手した。既に60年以上の歳月が経過していたため植生を含め周囲の風景は一変していた。ある生存者の証言では彼らのたどった道は縦の木に沿っていたのだが、アルグランが調査に着手した当時その近辺はぶなの林になっていた。ところがある人が大戦当時「ゴドフランの縦林」と呼ばれる私有林があったことを思い出した。それ以外はすべて公有林だった。当時の土地台帳を参照することによりこの問題は解決された。1914年当時確かに2区画の針葉樹林が存在していた。そして当時の地図により、公有林と私有林の間には堀があり、J地点と呼ばれる場所で堀の方角が変わることも判明した。さらにカロヌの塹壕からJ地点を経由してサン・レミに至る、今日ではなくなってしまっている広い林道の存在も明らかにされた。これにより、二つの中隊がたどった道筋の問題は解決された。

次の問題は死亡したフランス兵の埋葬場所である。死亡した場所に仮埋葬されたか、それとも占領した村の墓地に埋葬されたかという問題である。後者の場合であれば、平和の到来後その地域の軍の墓地に埋葬されなおした可能性がある。調査の厳密を期すため、アルグランは軍の埋葬に関する書類を調査し尽くした。しかし、この調査からは何も明らかにならなかった。そこから彼はドイツ軍が死者をその場で埋葬し、何らかの理由により、十字架を立て、死者の名をそこに記すことをしなかったのだ、という結論に到達し

た。通常は埋葬された兵士の氏名は国際赤十字に報告されることになっていたのだが、何らかの理由により、それもなされていなかった。

アルグランは近くにあるドイツ軍の墓地に9月22日の戦闘で死亡したドイツ軍兵士の墓が存在するか否かを確認しようとした。そうすれば戦闘に関係した部隊を特定することができるからである。詳細は省略するが、彼はそこで当日フルニエたちと戦闘状態にはいった部隊名を特定することができた。それに力を得て、彼はドイツ側の文書の調査によってさらに詳しい情報を入手しようとした。しかしながら膨大な労力を要する研究は彼一人の能力を超えていた。幸いなことに、1989年以降ドイツ語教師クロード・レニョーの協力が得られることになった。その結果、9月22日にフルニエたちがサン・レミの森で銃火を交えたのは、擲弾兵第6連隊であり、第5大隊の第2衛生兵中隊の救急車だったことが判明した。

ドイツ側文書によれば、背後を突かれたフランス兵たちはパニックに陥り、将校の周りにいた少数の兵士以外は潰走した。フランス側の証言が矛盾に満ちたものであるのはこうした不名誉な事情があったため、意図的に事実が隠蔽されたからであろう、と報告者モーリス・エルンスト氏は推定している。

ドイツ側文書では自国の救急車が襲われたことを誇張しているが、それは自らが大战初期に行った行為を正当化するためだ、とアルグラン氏は判断している。多くの場所でドイツ軍は敵の負傷兵の止めを刺した。場合によっては野戦病院にいる負傷兵まで殺し、フランス人市民や神父に命じて埋葬させ、最後にはその埋葬者をも殺害することがあった。ドイツ側文書ではこうした行為もフランス軍の蛮行に対する正当な復讐であると主張されているのである。しかし、フランス人であるアルグラン氏やエルンスト氏によればそれは敵方を萎縮させるためのドイツ軍の残虐行為になるのである。混乱状態の中で起こったこうした行為の正確な再現は、例えばいわゆる「南京大虐殺」などと同様時間の経過とともに水掛け論になってしまう場合が多い。

ところで、アルグラン氏の研究でドイツ側文書として引用されているのは

擲弾兵第6連隊史および『フランス、およびジュネーヴ条約』についての報告書である。前者は戦後になってから作成された。この文書によればフランス軍は意図的に救急施設を攻撃したことになる。そして潰走後、踏みとどまった少数のフランス兵は駆けつけたドイツ軍に包囲されて捕虜にされた。その後彼らは救急施設を襲撃したかどで銃殺刑に処せられた、というのである。ところで問題の救急施設の襲撃であるが、フランスの生存者の証言では、この攻撃はまったくの誤解に基づくものであることになっている。

もう一つの文書は戦争中に作成されたものである。これはドイツの軍事法廷が集めた証言でフランス軍の戦時法違反を立証することをその目的としている。この中にあるドイツ軍将校による興味深い証言が見受けられる。それは他ならぬフルニエ中尉自身に関することである。14年末になされた証言において、彼は戦闘終了後1人の重傷を負ったフランス人中尉が木にもたれかかっているのを目撃した。その中尉は、自分はフランスの前大統領カジミール・ペリエに縁（ゆかり）のものであると述べ、家族に自分の消息を伝えることを依頼した。

綿密な調査の結果、アルグランはフルニエたちがその場で集団墓地に埋葬された、という結論に到達した。そこで彼はその所在を確定するため、1平方メートル四方に土地を区画し、掘り起こすことにした。J地点が基点に定められた。しかし、こうした作業には膨大な労働力が必要になる。彼は土地の人々の協力を仰ぎ、自らの休日に現地へ赴き、現地の人々とともに発掘に従事した。ある時、兵士の所持品には金属が使用されているので、金属を探知するための器具を用いることを提案した者があった。そこで地雷探知器が使用されることになった。その結果1991年の5月に探知器が金属の所在を告げた。掘り起こしてみたところ、ボタンや赤い旗の断片が見つかった。恐らくこの下に遺骸が埋葬されているのであろう、と思われた。これから先の調査は慎重さが要求された。いくつもの行政機関や人類学者や考古学者の協力も必要になった。発見からおよそ半年後の1991年11月になってやっと発掘作業が開始された。その結果幅2.5メートル、長さ4.5メートルの墓地が発

見された。固い地質で深く掘ることが困難なため、きわめて浅い墓地だった。21体の遺骨が互い違いに埋葬され、将校は片方の隅にまとめて埋葬されていた。遺骨に残された記章には288という連隊を示す数字があった。氏名を記した認識票も見つかった。これらの証拠により、フルニエたちの遺体であることが確認された。

遺骨はメッスに移送され、人物の特定および銃殺されたか否かを調べるため人体測定検査に付された。その結果、彼らは銃殺されたのではなく、重傷を負い、止めを刺されたのであろう、ということになった。墓の中からはまた幾つかの遺品も見つかった。その中にはフルニエの副官をしていたアンベール少尉の結婚指輪もあった。その指輪は1913年生まれの花嫁さんに手渡された。父親の記憶を持たない娘は思い出の品を深い感動とともに受け取った。

遺骨との再会を果たした遺族たちの意向に従い、兵士たちの遺骨はサン・レミの軍人墓地に埋葬されることになった。そして、墓地のあるサン・レミの村ばかりでなく、周辺の自治体もこれを支持した。埋葬式は1992年11月10日在郷軍人担当大臣の臨席のもと挙行された。ミサではそれぞれの兵士の名前がそれぞれの守護聖人の名とともに呼ばれた。出征する兵士の恐怖を当時の方言で歌った歌が奉げられた。大臣は短いけれど格調の高い演説を済ました後、一人ひとりの墓前に進み遺族に挨拶した。その間に村の子供たちが三色の花を組み合わせた花束を墓前に供えた。こうしてフルニエをはじめ、1914年9月22日の戦闘で倒れた21名の兵士たちは死後80年近くも経ってようやく安息の地を見出したのである。

〔注〕

- (1) 「第一次世界大戦まで」中央学院大学教養論叢第5巻第2号 1993年1月
- (2) 「最後の日々」中央学院大学人間・自然論叢 第3号 1995年12月
- (3) Alain-Fournier, *Lettres à sa famille et à quelques autres* p.657 以下 F.と略記
- (4) *Ibid.*,p.531

- (5) Ibid.,p.533
- (6) Alain-Fournier Madame Simone Correspondance 1912-1914 Fayard (1992)
p.257 以下 S.と略記
- (7) Ibid.,p.260
- (8) F.,p.534
- (9) S.,p.264
- (10) Vie et passion d'Alain-Fournier Isabelle Rivière, Fayard (1989) p.369 以下
VPAFと略記
- (11) Ibid.,p.369
- (12) Ibid.,p.371-p.372
- (13) F.,p.537
- (14) Ibid.,p.538
- (15) S.,p.274-p.275
- (16) F.,p.539
- (17) S.,p.270
- (18) F.,p.541
- (19) VPAF.,p.379-p.380
- (20) Ibid.,p.383-p.384
- (21) S.,p.276
- (22) Ibid.,p.278
- (23) Ibid.,p.283
- (24) F.,p.543
- (25) S.,p.283
- (26) Ibid.,p.284
- (27) VPAF.,p.462
- (28) S.,p.288-p.289
- (29) Ibid.,p.291
- (30) Ibid.,p.292

- (31) F.,p.544
- (32) Ibid.,p.545
- (33) S.,p.294
- (34) Ibid.,p.296
- (35) Ibid.,p.298
- (36) Ibid.,p.301
- (37) VPAF.,p.401
- (38) Ibid.,p.394
- (39) Ibid.,p.394-p.395
- (40) MYSTERES D' ALAIN-FOURNIER, Colloque organisé à Cerisy par A.Buisine et C.Herzfeld Librairie NIZET (1999) には16篇の論文が収められている。本稿のこれ以降の記述は Maurice ERNST氏の La mort d' Alain-Fournier lors du combat du 22 septembre 1914 dans le bois de Saint-Rémy (p.205-p.214) に全面的に依存している。